

豊子愷訳『源氏物語』の出版の遅れについて

呉 衛峰

筆者が「『源氏物語』の中国語訳——豊子愷訳の成立を中心に——」¹という論文の中で、豊子愷訳の成立にまつわる諸問題について検討した。ただし、紙幅のため、そこで触れなかった問題も一つ残っている。

同論文には、「出版こそ林文月訳より数年遅れたものの、原稿の完成という意味では、豊子愷訳は林文月より十年以上早く、中国語による最初の『源氏物語』の完訳である」²という文言がある。豊訳の出版が遅れた最大の原因は勿論、文化大革命による文化出版事業の中断であるに違いないが、豊訳に対する人民文学出版社内部の意見の対立も一つの原因であることを示している資料もある。

一

『源氏物語』の中国語訳はまず銭稻孫に依頼され、氏の遅筆により後に豊子愷に委任された経緯があった。その後のことについて、人民文学出版社の副社長を務めていた楼適夷が「我与日本文学」（私と日本文学）という文章の中で、以下のように回想している。

(1) 豊子愷訳『源氏物語』の出版の遅れについて

丰子恺先生五十年代应我之请，就花了五年译出了全稿，但编辑部的先生对此不感兴趣，大包大包用毛笔字写得恭恭敬敬的正原稿，却在编辑室的柜子里沉睡到十年之久，我闲着无事，从那几借出来通读了一遍。³

（豊子愷先生が一九五十年代、私の依頼を受けて、五年間で『源氏物語』の全文を訳出した。しかし、編集室の先生はそれに興味を持たなかったゆえ、筆で端正に書かれた原稿が包まれたまま、編集室の棚に十年も放置されていた。私は暇だったので、そこから借り出して通読した。）

楼適夷がここで言いたかったのはおそらく、豊子愷の原稿がもっと早く出版されれば、文革による中断もなかったことであろう。「筆」というのは楼氏の記憶違いであり、筆者は豊子愷の万年筆による手稿を実見したことがある。

豊訳の八十年代の出版時の編集担当者だった葉渭渠氏にインタビューした時、彼も同じ見解を示した。葉氏によると、楼適夷の意見では、全訳が完成する前に、完成した部分を順次出版できたはずだったが、当時の編集担当者の反対で実現できなかったとのことである。

二一

当時の編集担当者だった文潔若氏に直接確認できなかったのは残念に思うが、彼女の一連の文章から、およそ当時の意見対立の原因を見て取れる。「怀念老社长楼适夷」（楼適夷社長の思い出）によると、豊子愷が郵送した一帖ごとの翻訳を文氏は錢稻孫が訳した最初の五帖とつき合わせて検討してから、錢稻孫のところへ意見を伺いに行った。眼疾を患わしていた錢氏が耳のみを頼って豊訳を校訂した。

岂料把三十二页的「校订笔记」整理出来后，楼适夷怕我提错了，惹丰子恺不高兴。照他原先的意见，我本来应该一字不改地发稿。我仍不死心，向老编审张梦麟请示后，送交周作人去审阅。他在日记里记载了此事。周作人把自己的意见用毛笔写在我这份「校订笔记」上，信里也有对丰子恺不客气的话，这下子楼适夷很恼火，说他「花好几天时间才把这些笔记及审阅意见看完」，遂搁置下来。⁴

（钱的意见是三十二页的「校订ノート」に整理してから、楼適夷は私の校訂に間違いがあったら豊子愷を怒らせまいかと心配していた。そもそも彼の考えでは、私は原稿の一字も直さずそのまま出版にまわして行くべきだったのである。私は諦め切れず、高級編集者の張夢麟に指示を仰いだ後、周作人に「校訂ノート」の確認を依頼した。日記にもこの件を記している周作人は自分の意見を私の「校訂ノート」に筆で書き込んだ上、手紙で豊子愷に対してかなり厳しいコメントをした。楼適夷は激怒し、「数日をかけてやっとこれらのノートと意見を読み終わった」と不満があった。結局、当時の豊訳出版は見送ることになった。）

副社長の楼適夷が激怒したとは言え、編集者を含む日本古典文学の専門家たちの意見を尊重していたと見受けられよう。豊訳に対する周作人の厳しい評価は、『周作人与鲍耀明通信集（1960—1966）』⁵より窺える。筆者はかならずしもそれに賛同できないが、本題から逸れるので触れないことにする。ただし、文潔若が豊子愷より錢稻孫が適任であるという認識を持っていることは、以下の文章にも現れている。

林、丰的译文水平相当高，但均未能超过钱稻孙。四十年前的「文革」使钱先生这位杰出的教育家兼精通日、意、德、法语的资深翻译家过早地逝世。倘若假以天年，今天的广大读者本来能读到原汁原味儿、日汉对照的《源氏物语》。⁶

（林文月、豊子愷の翻訳はレベルの高いものではあるが、錢稻孫の訳に及ばない。四十年前の文革は錢先生という

(3) 豊子愷訳『源氏物語』の出版の遅れについて

優れた教育家、日本語、イタリア語、ドイツ語、フランス語に精通する大翻訳家をあまりにも早く逝かせた。もし天寿を全うさせれば、今日の読者たちは本場の味そのままの、日中対訳の『源氏物語』が読めるはずである。）

ちなみに、錢稻孫が訳した五帖のうち、生前雑誌に発表した「桐壺」⁷を除いて、文革中に紛失した。

おわりに

豊子愷の『源氏物語』中国語訳をめぐって、近年様々な憶測が飛び交っている。本文の冒頭に掲げた拙論は、すでにその一部をはつきりさせた。本文は特に楼適夷と文潔若のどちらが正しいかということについて判断を下そうとするつもりはない。豊子愷訳『源氏物語』の成立の背後に隠れた様々な事実を明らかにしようとしたものである。

結果としてみれば、『源氏物語』の中国語訳を平生の宿願としていた錢稻孫の無念と、自分が心血を注いで完訳した『源氏物語』の出版を生前に見られなかった豊子愷の遺憾が残ったと言えよう。この小文を以て激動の歴史に翻弄された二人の優れた翻訳家に改めて敬意を表したいと思う。

注：

- 1 日本比較文学会編『越境する言の葉——世界と出会う日本文学 日本比較文学会創立六〇周年記念論文集』（彩流社、二〇一一年六月）、一七三―一八四頁。
- 2 同上、一七三頁。
- 3 『日本学論壇』（長春：東北師範大学、一九八六年一月）、六頁。この雑誌は後に『外国問題研究』と改名した。
- 4 『新文学史料』（北京：人民文学出版社、二〇〇五年二期）、二〇五頁。
- 5 開封：河南大学出版社、二〇〇四年四月。三〇八頁、三一〇頁、三四〇頁を参照。
- 6 『源氏物語』与钱稻孙』『作家雜誌』（長春：中国航空報、二〇〇六年八期）、三頁。
- 7 『譯文』（のちに『世界文学』と改名）一九五七年八月亞洲文学專号。

付記：本文の作成において、科学研究費補助金「李叔同（弘一法師）をめぐる日中文化交流の研究：中国の近代化と日本」の助成を受けている。